□ 作品紹介 □

一、鳥越亜希
　創作　調和体　『一瞬の　』　半切
　意味合いを楽しんでもらえればいいです。何でも「一瞬の」って頭につけたらカッコよくなります。
　本当は「光」をつけたかったんですが。みなさんに譲ってあげます。



二、平川真弓
　臨書　行書　米芾『辨法帖』　半切
「逸少其間以子敬及真智永爲」
　米芾を特に何も考えずに書いてしまいました。「其間」の部分が私にとっては難しく力不足だったと反省する点がありますが、何も考えずに書いた分、全体として自由に書けたように思います。今度も米芾を書きたいと思いました。



三、白田全弘・小島千明・河野宏明
　合作・創作　調和体　全紙三連
『負けないで』（白田）
『気楽に行こう』（小島）
『Seven　Rainbow』（河野）
　ZARD のボーカル、坂井泉水さんが他界して早一年。彼女の詞からは、夢をもつことの大切さ、素晴らしさを教わっていたような気がします。そんな思い出を何らかの形に残そうと思い、代表曲「負けないで」の詞を綴って作品にしてみました。この曲のストレートなメッセージが皆さんに伝わればいいなと思っています。（白田）
　坂井泉水さんの詞は、聴くものを前向きに励ましてくれるものが多いと思います。私にはその言葉が、あまりに真っ直ぐなためか、不思議なほど力をもって感じられました。書でうまく表現できませんでしたが、わかりやすいが故の深さを感じてもらえると嬉しいです。（小島）
　先日、坂井泉水さんを追悼するコンサートに参加してきました。今回の作品はコンサートに参加して、ますます強くなった坂井さんへの追悼の意を胸に抱き揮毫したものです…と言いたかったのですが、最終コンサートは命日である２７日（〆切後）に行われたので作品を先に仕上げました…（河野）







四、山本典子
臨書　楷書　褚遂良『雁塔聖教序』　半切
「可徴雖愚不惑形潜莫観在智猶迷」
書道より習字歴が長いせいか、きっちりとした美しさのある楷書に惹かれる傾向にあります。今回は「不」と「在」の字の流麗さに惹かれてこの箇所を選びました。原本の美しさの何十分の一かでも再現できていれば幸いです。横から読むと迷惑となっているところもありますが・・・。これは完全に想定外でした。



五、久田喜朗
創作　行書　王維『班倢妤』　半切
「怪来妝閣閉　朝下不相迎　總向春園裏　花間笑語聲」
あまり練習時間が取れず、まだまだ至らない所がありますが、取れた練習時間内で出来るだけ集中して仕上げました。まだ半切は二回目なので、配置のバランスに苦労しました。



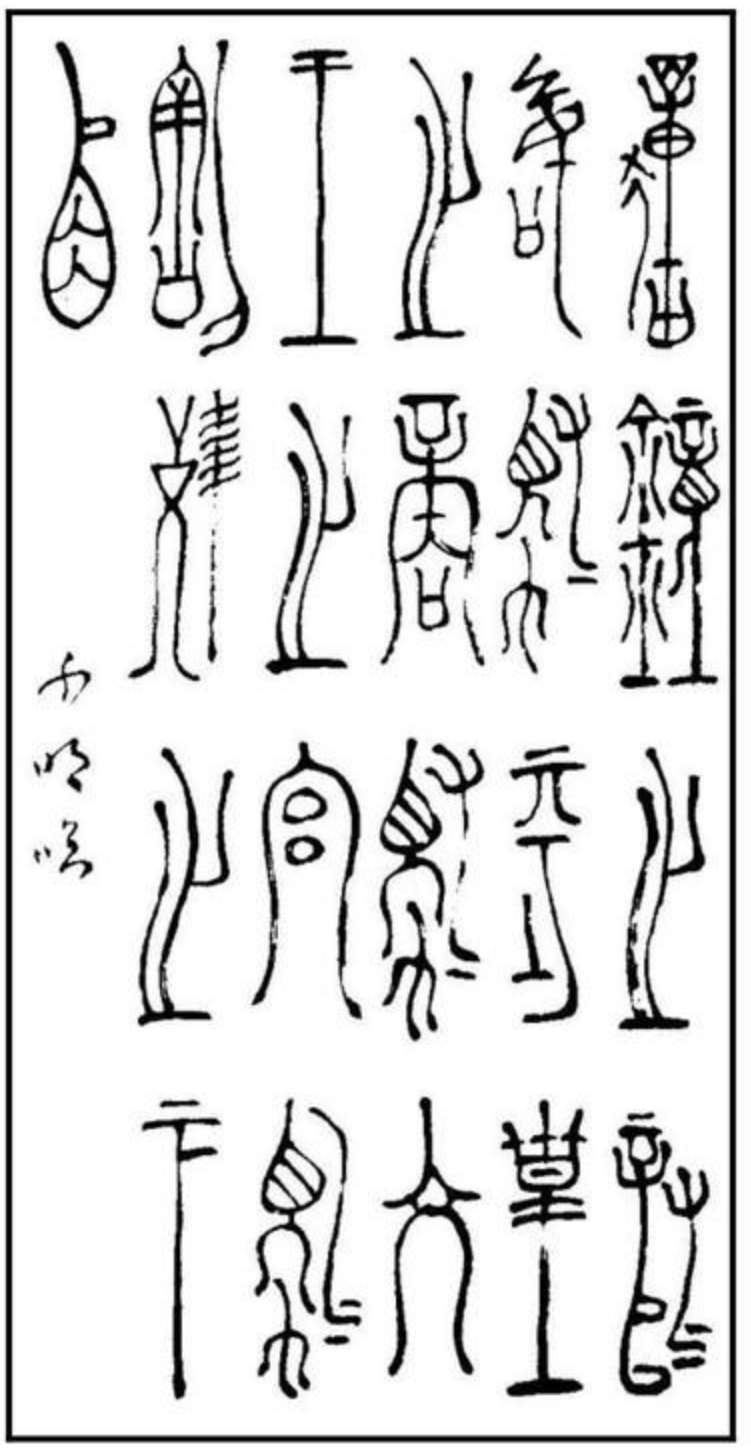
六、小島千明

臨書　篆書　『曾侯乙編鐘―下段第一鐘―』　全紙

「獸鐘之　坪皇之　文王之宮　割　之下角」

篆書（というか金文？）をちょっとやってみたかったので

やってみたところ、なんかよくわかりませんでした…！



七、上原達也

臨書　草書　『李太白憶旧遊詩巻』　全紙

「邀我吹玉笙。樓霞樓上動仙樂。　然宛以鸞鳳鳴。」

再び黄庭堅の作品に挑戦しましたが、予想以上に苦戦しました。

どこをどのように表現すれば作品として映えるか、そういった試行錯誤を繰り返しました。楽しんで見ていただけたら幸いです。



八、河野宏明

創作　篆刻・行草書　『禍中に福有り』　聯落

「禍中有福・失火而遇雨失火則不幸遇雨則幸也」

「不幸の中にも必ず幸福がある」という意味です。人生の不幸・幸福は予測しがたいことの例え。

これからの人生において直面するかもしれない苦難・困難の状況においても常に心の片隅に留めておき、前向きに力強く生きていきたいものです。



九、門脇友維・肥後真・河野宏明
合作・臨書　楷書　光明皇后『楽毅論』　半切
「澤如春下應如草道光宇宙賢者託心」（門脇）
「鄰國傾慕四海延頸思戴燕主仰望風聲二城」
「必從則王業隆矣雖淹留於兩邑乃致」（肥後）
「速於天下不幸之變世所不圖敗於垂成時」
「運固然若乃之以威劫之以兵則攻」（河野）
楽毅論を書くのは三回目です。でも今回は初めて半切サイズというこことや良紙に書くということもあり、新鮮さも味わえました。（門脇）
個性的な楽毅論の字体は書いていて楽しかったのですが、合作ということで物凄くプレッシャーを感じながら書きました。狭い下宿で、しかも深夜に作品を書いていたためにあれこれハプニングが発生しましたが、それも今となっては懐かしい思い出です。（肥後）
色付きの紙に書くのを提案したのは私であるが、その意は「楽毅論のもつ、華やかさ、をさらに際だたす為」であり、「華やかな紙を使うことにより、私個人の練習不足を感じにくくさせる為」では決してない、ということを分かって頂きたい。何事にたいしても謹直である私の人柄を考えれば明らかであろう…（河野）



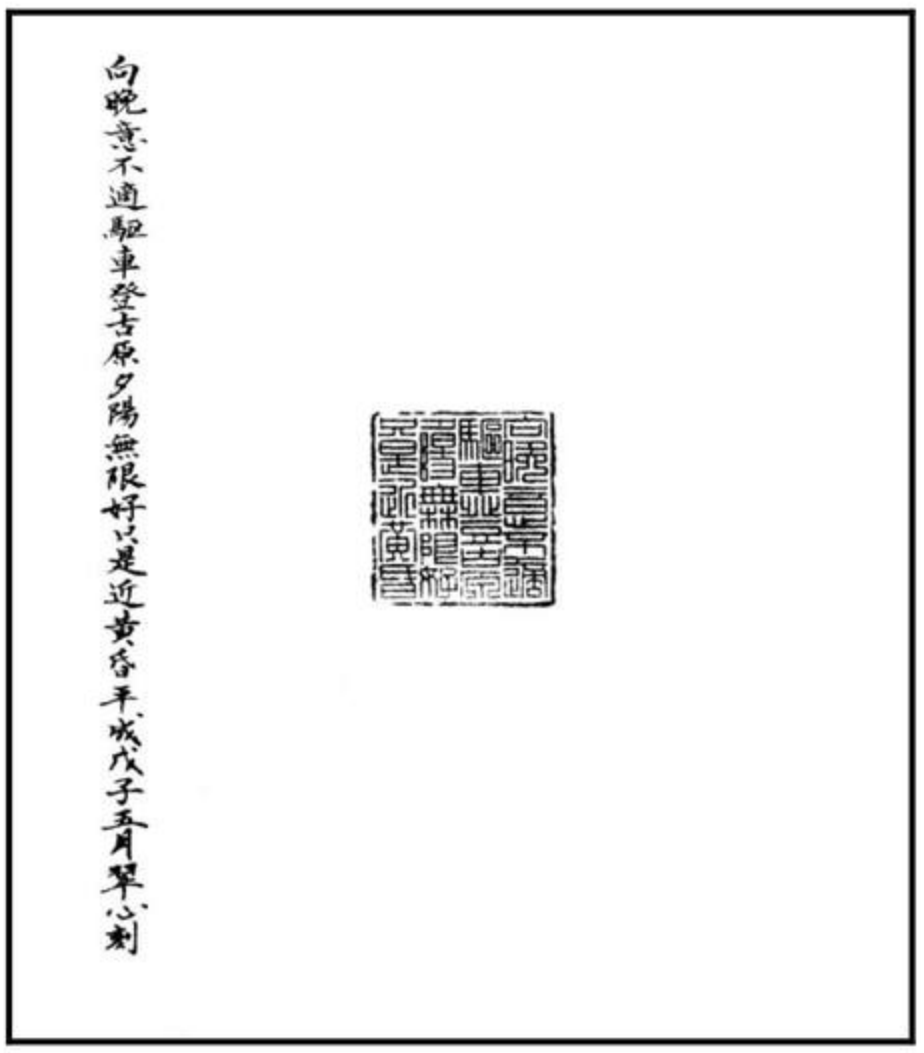
十、北山聡佳

創作　篆刻　『李商隠詩』　半紙

「向晩意不適駆車登古原夕陽無限好只是近黄昏」

一番苦手な篆刻ですが、大変興味があり、趣味としてチャレンジしています。またここに使った文字、篆書は最も古い書体で文字学的に造形について考えながら彫りました。

苦手なものにも挑戦し、すべての書体、分野に猛るよう精進してまいりたいと思います。

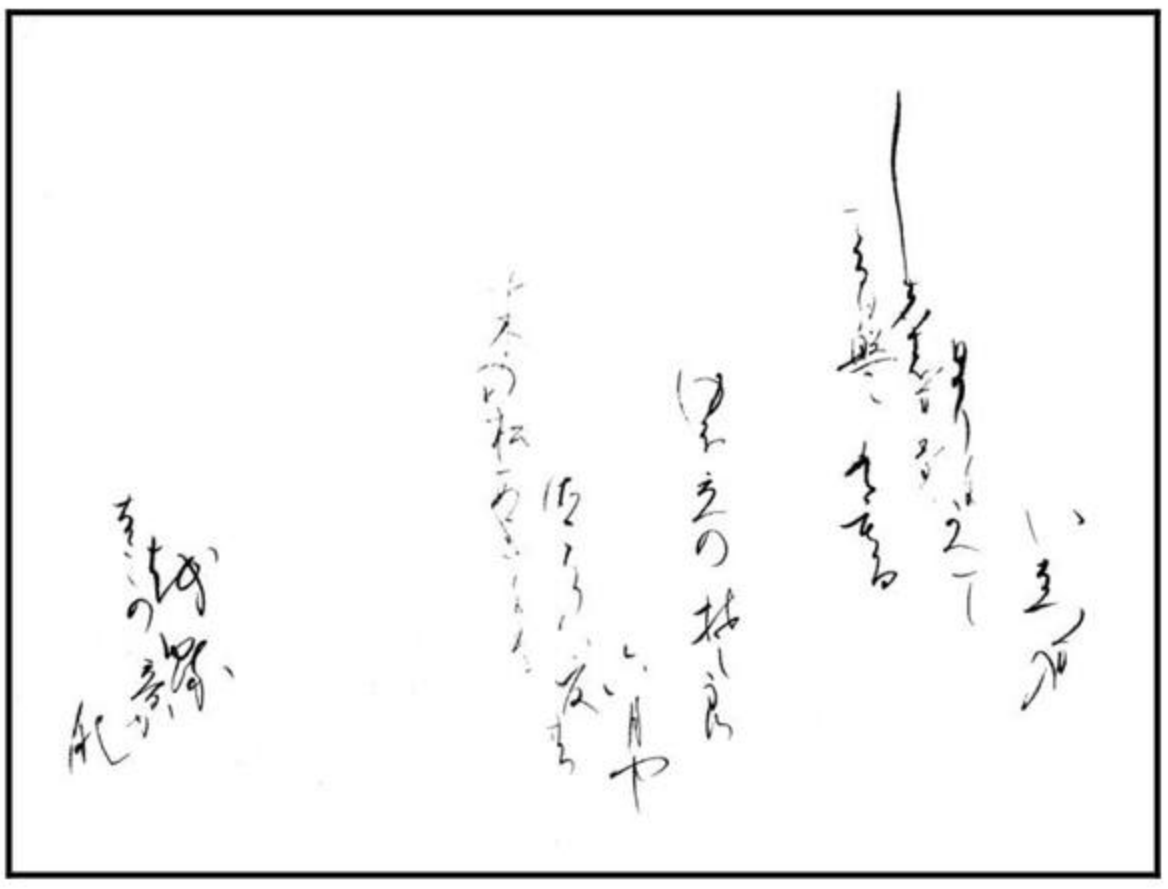


十一、頓部李歩子

創作　仮名　『なつ』　全懐紙

「いなづまのひかりにかへてしばしまた
てるひはくもるゆふ立のそら
六月やさこそは夏の末の松
あきにも越ゆるなみの音かな」

構成、変体仮名など、アドバイスを受けながら自分で考えてみました。もっと素晴らしい作品を鑑賞したり、絶景を見たりして目を養い、また挑戦したいです。

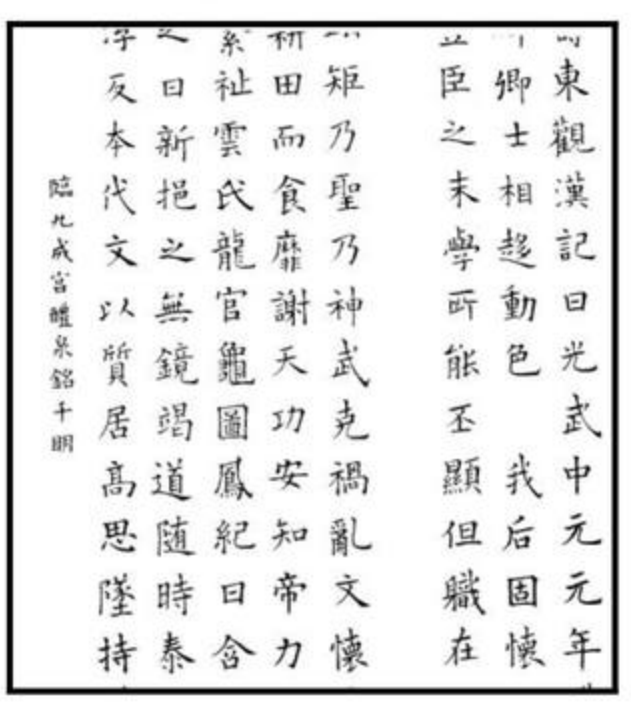


一二、河合直樹
創作　草書　『登』　３尺×４尺



パターン化しつつありますが、好きなものはしようがない！　再び淡青墨の一字書に取り組みました。こういった類の作品は臨書とは異なり、完成度は必ずしも書いた枚数に比例しません。ある意味、努力が報われにくいジャンルといえましょう。だからこそ、その〝一瞬の煌き〟を得るために平素の練習が不可欠となるのです。

一三、小島千明
臨書　楷書　歐陽詢『九成宮醴泉銘』　３尺×６尺
「九成宮醴泉銘　維貞観六年…」



先を越される前に、ということで全臨しました。色々とある心残りの中でも特に、誤字があまりにも多すぎて、色んな方に申し訳ないです。それでも、かなり楽しんで書くことができました。いつかもっと良いものを書きたいと思います。

十四、西原英臣
臨書　行書　王鐸『自作五律軸』　２尺×８尺
「花林深礙日細逕曲隨人雞犬歷年熟池塘依舊新畦平堪理竹地潤較宜蓐鞅掌空繁暑回頭悟世塵」



明、清の時代で有名な書家である王鐸の臨書に初めて挑戦しました。字のバランスや空間の取り方が難しく、苦労しました。王鐸の作品は条幅作品を書く上で学ぶべき点が多く、これからも色々な作品を書くことによって学んでいきたい。

一五、河合直樹

臨書　行書　顔真卿『争坐位文稿』　全紙

「魯郡開国公顔真卿謹奉書于右僕射定襄」

愛しの『祭姪文稿』をひとまず卒業し、「基本」とされる『争坐位文稿』に取り組んでいます。『蘭亭序』などにもいえることですが、「基本」であるものほど作品にしにくいものはありません。自分の筆力がそのまま露呈されてしまうからです。今回は拙作となりましたが、めげることなく今後とも精進していきたいと思います。



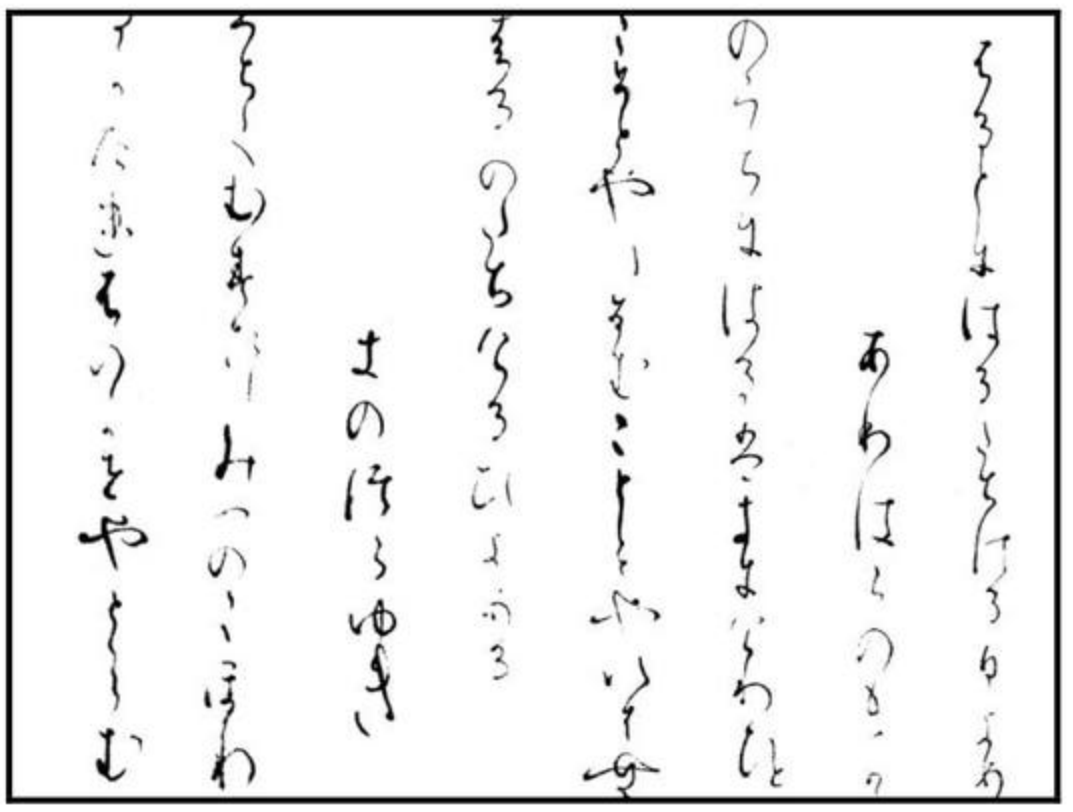


一六、上原達也
　創作　行書　李白『静夜思』　２尺×８尺
「牀前明(看)月光疑是地上霜挙
頭望山月低頭思故郷」
　初めての創作作品です。やはり思った以上に難しく、ようやく辿り着いたのが妥協点。自分の未熟さを実感できました。
　なお、「明」という字は中国における解釈で、日本では「看」という字になっているのが一般的です。



十七、西原英臣
　臨書　草書　傅山『草書青羊庵七言絶句』
　２尺×８尺
「幽花爛熳闘春暉、菴主扶藜啓石扉。
暖雪団々山　蔦、香風陣々野薔薇。」
　今回も傅山の臨書に挑戦しました。彼の生み出す字間や行間を上手く表現できませんでした。作品製作をする難しさを改めて痛感する一方、傅山作品を製作する上での今後の課題や、創作作品を製作する上で参考になる部分もあり、収穫の多い作品となりました。

十八、得能麻希
臨書　仮名　伝紀貫之筆『高野切第一種』
３０×１２０cm
「ふる年に春たちける日よめる…」
　春休みから書き始めて気付くともう初夏…月日の経つのは早いなぁと思いながら、季節の移り変わりを歌う八首を淡々と綴ってみました。所々、気に入ったり気に入らなかったりする点はありますが、限られた時間で書き上げた今の私の渾身の一枚です。書き終えて一言、「長っ…！！」



十九、松永智子
創作　調和体　中原中也『春宵感懐』　半切
「雨が、あがって、風が吹く。雲が、流れる、月かくす。みなさん、今夜は、春の宵。なまあったかい、風が吹く。」思いの色がシンクロする。そんな、春の移りゆく空、そこ吹く風に、「なまあったかい」景を描きたく墨をすり筆を執りました。実は、前回の書展でも中也の冬の詩を書いています。その時ある方から戴いた「中也シリーズを手がけてみては」との　お言葉が、こリて　情い　なみ雲「雨の『春宵感懐』へのきっかけとなりました。一期一会を、大切にしたいです。



二〇、鳥越亜希
臨書　行書　米芾『徳忱帖』　半切
「審道味清適」
書の雰囲気と文章の意味で選びました。「道味の清適なるを審らか(＝くわしい)にす」。
いろんなことにそうありたいです。



二一、西原英臣
創作　調和体　『白い花』　半切
もう地上では逢えない人へ。



二二、頓部李歩子
創作　調和体　色紙
「日暮らし硯に向かひて」
大学生は自分の時間がたっぷりあります。去年、私はその時間を書道に捧げることを決めました。兼好法師が『徒然草』執筆で硯に向かうなら、私はよい作品を作るために硯に向かいます。



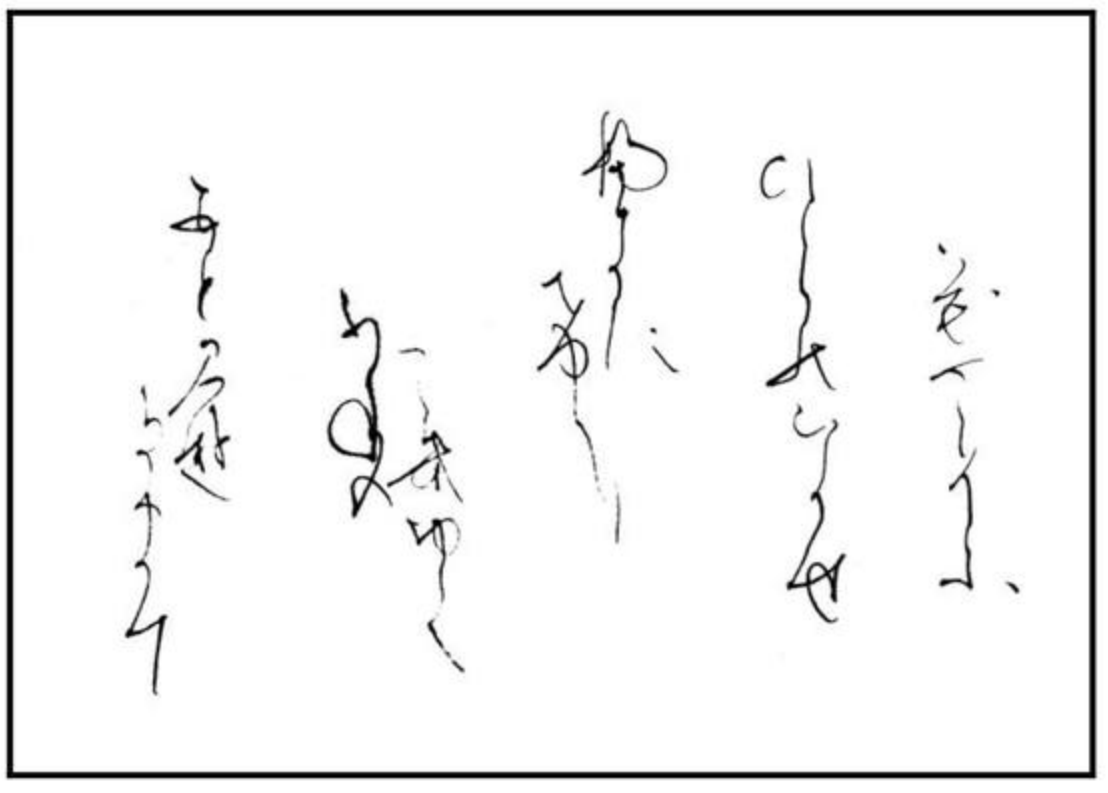
二三、北山聡佳

創作　仮名(細字)　『花さそふ』　半懐紙

「花さそふ比良の山風吹きにけり
　漕ぎ行く舟の跡みゆるまで」

普段は書く機会の少ない細字にチャレンジしました。ここ数年間研究している香紙切と良寛を参考に、筆勢のある実画の持つ強靭さ、良寛の人生を表わすかのような冷静かつ自由奔放な筆脈を取り入れようと書き進めました。

4月に入部し初めて出品させていただきました。これからさらなる進化を遂げられるよう頑張っていきます。



二四、河畠久実子

臨書　篆書(金文)　『中山王鼎』　半切1／2

「人為(ひととなり)」

「会心の出来」からはほど遠いですが、これに決めたのは、この一枚を書いた日のことを、わすれないためです。



二五、三幣剛史・白田全弘

合作・創作　行草書　半切二連

「白蘋千點鷺初散」(三幣)

「紅雨一簾鶯乱啼」(白田)

僕にとっては初めての合作です。合作にはやはり統一感がなければ…との志を持って臨んだのですが、お互い時間が取れずほとんど別々の練習になってしまいました。自分の個性やクセを最大限押さえ、同じ作風にまとめることの難しさを実感しました。(三幣)

「白い蘋花がおびただしく咲いた水面に鷺がいて、まるで花のようだ。鶯のさえずりが止まない中、落花が水面に降りそそいでいる」という意味です。初夏にぴったりの言葉だと思い、書いてみました。(白田)



二六、竹倉功祐

創作　調和体　YUKI『JOY』　半切

「しゃくしゃく余裕で暮らしたい　約束だって守りたい
誰かを愛すことなんて　本当はとても簡単だ」
（作詞:YUKI・蔦谷好位置）

兄の結婚式で感じた幸せな気持ちをなにか形に残してみたいと思い、柄にも無い歌詞を選んでみました。

その結婚式翌日にこの作品に取り掛かったのですが、字体もタイトルを重ねたことも全てその場の勢いです。ただ、その後もこれ以上の作品は生まれませんでした。きっとその日はまだ心の中に「なにか」が残っていたんでしょうね。





This book was
made by the LeME